

## 17. ふしぎな飛行機

各務原市立各務小学校

6年 鈴木 千晴

5年 早川 瑞姫 野村 彩乃

↓

敦賀市立黒河小学校

6年生一同

キーンコーンカーンコーン。

学校のかねが鳴った。教室がザワザワとうるさくなった。その中に、

「ああ、つかれた。やっと帰れる」

と言う声があった。ケンゴだった。ケンゴは、外で遊ぶことが大好きだった。帰りの会も終わり、下校とちゅう、

「あれ？」

ケンゴが何かに気付いた。

「こんな所に、お店屋さんなんてあったかな？ まあいいか。後でまた来よう」

と思いながら帰った。ケンゴは、その店に行く準備をした。何かいい物があったら買うお金と、ちょっとおなかがすいた時のお菓子をカバンにつめて持って行くことにした。ケンゴは思った。

「一人で行くより、たくさんで行った方がいいや。よし、クミとリクトをさそおう」

クミとリクトは、ようち園から一しょの親友だった。さっそく二人に電話をした。リクトとクミは、勉強をしていたらしいが、勉強より楽しそうだと一しょに行くことになった。待ち合わせをして店に向かった。あまり遠くない所だ。自分が持って来たお菓子をクミとリクトに分けたりしている間に、店に着いた。看板はふつうだったが、お店がハイテクに見えた。入ってみると、外とはちがひ、少しだけボロッとしている。売っている品物は少なかった。不思議な物があった。雲みたいなふわふわした物の上に飛行機が乗っている。

「これ、ほしいかも」

ケンゴは言った。その不思議な飛行機を手にとって見たら、ますますほしくなった。

「これください」

カウンターの上に不思議な飛行機を置いた。コツコツ……と、奥から足音が聞こえ、店の主が現れた。六十歳ぐらいのおばあさんである。おばあさんは、こう言った。

「その飛行機は一万円だよ」

「え、そんなにするの？ 持ってないよ」

ケンゴは、困った顔で言った。それを聞いて、おばあさんは、

「じゃあ、五百円でいいよ」

と、やさしい顔で言った。

「ありがとうございます！」

ケンゴはうれしくて、大声で言った。その間に、クミは宝箱を、リクトはラジコンを買って、校庭で遊んだ。ケンゴは飛行機を飛ばした。すると、なんと飛行機がどんどん大きくなっていった。ケンゴは、不思議で夜もねむれなかった。

「明日、もう一回あの店に行ってみよう」

次の日、店は閉まっていた。その次の日も……。そしてその次の日、店の前に、黒いスーツにサングラスをかけた二人組が立っていた。二人は、何かごそごそ話をしている。よく耳をすますと、

「あの飛行機はどこへいったんだ。あれがないと無理だ」

と言っていた。ケンゴはこわくなってにげ出した。

それから一週間、ケンゴは外へ出なくなった。

そして何日かたったある日、リクトが息を切らしながら、ケンゴの家まで走って来た。

「ケンゴ！」

「どうしたんだよ、リク」

「クミが……さらわれた！」

リクトは、泣きそうな声で言った。

「なんだって！ それではん人の顔を見たのか！」

リクトはだまりこんだが、しばらくして、

「クミは、サングラスをかけた二人組の男にさらわれたんだ！」

「オレが近くについていたのに……」

「こんな所で待っていても、クミは帰って来ないぞ！ 早く探しに行こう」

リクトとケンゴは、クミを探しに行った。

まず、あの二人組の男がいたあの店へ行った。

でもその店はなかった。

「一体どうなっているんだ！」

「もう、終わりだ……。クミは帰って来ない」

「何言ってるんだ！ あきらめるな！」

ケンゴは、おこるような声で言った。

二人は必死になってクミを探した。

しかし、夜になっても、クミは見つからなかった。

「クミー、クミー、いるなら返事をしてくれよ！」

リクトは泣きながら言った。★

なかなか見つからないので、二人は帰った。

次の日。二人は朝から町じゅう探し回っていた。公園で休けいしようと、ベンチにすわった。リクトがいきなり立ち上がり、手に紙切れを持ってこっちへ来た。

「おい、ケンゴ。これ、地図みたいだぞ」

その地図を見てみると、

『クミという小娘をさらった。返してほしければ飛行機を持ってこい』

と書いてあった。

「そうだ。あの飛行機は、飛ばすと大きくなるんだった」

ケンゴは思い出したように叫んだ。

「そうか。それでその場所まで行けばいいんだ」

「で、それってどこなんだ？」

と、ケンゴが言った。

「高山。飛騨の高山だよ」

リクトがつぶやいた。

「それってどこだよ？」

「オレも分かんねえよ」

「そうだ。今から先生に聞きに行こうぜ」

二人は急いで学校に向かった。とちゅうすれ違った友だち何人かが声をかけたが、気づく気配もなく前をしっかりと向いて必死に走っていた。

学校に着いた。二人は声をそろえて、そしてはっきりと、

「先生、高山ってどこですか？」

と、あいさつも忘れいきなり話し始めた。そんな二人に先生は、驚いた様子も見せず落ち着いてこう言った。

「高山は、岐阜県にあります。ここから車で二時間ぐらいかかりますよ」

と、いつものやさしい穏やかな声で答えてくれた。

「二時間もおー」

先生とうってかわって、二人は大きな声で学校中響き渡る声で叫んだ。そう言ったかと思うと、

「ありがとうございました」

とあいさつをして、先生が話しかけてることに気づかず、

「じゃあ、行くか」

と走り出していた。

すぐに二人は、あの不思議な飛行機に乗って高山に向かった。あわてていた二人だったけれどなんの心配もなく不思議な飛行機に乗っていた。想像以上に快適に飛行を楽しんでいた。これまでの心配を忘れるほど空の旅を楽しんでいた。しかし、突然、鳥の大群がこちらに向かってやってきた。どんどん近くに鳥の大群がやってくる。

「わあ、どうしよう。鳥の大群だ。このボタンは何だ」

二人は、叫ぶと同時にそのボタンをおした。その時だ。飛行機がものすごいスピードを出し始めた。あっという間に鳥の大群から離れることができた。鳥たちがみるみる小さくそして、消えていった。

「それにしても、ものすごい大群だったねえ。初めて見たよ、あれだけの鳥」

ケンゴが目をまん丸くして早口で言った。

あっという間に、高山に着いた。飛行機は、すうっと着地し二人は初めての岐阜の地、高山に降り立った。そして、持ってきた地図を開けた。

「右に行って、真っすぐに行こう」

リクトが迷うことなくしっかりとした口調で言った。

「本当に、そっちでいいのか」

ケンゴは心の中で不安に思ったが、リクトがあまりに堂々と切り切ることで心配な気持ちも忘れ、リクトについて行くことにした。

「あ、間違えた。こっちだ」

リクトが急に声をあげた。

「ほらー。やっぱり間違えてるじゃないかー。しっかりたのむぞ」

ケンゴが少々あきれて言った。

「ごめん、ごめん」

リクトが頭をポリポリかきながら言って舌をぺろっと出して見せた。

「あ、そんなこと言っている場合じゃない。早くクミを探さないと！」

ケンゴが早口で言ってリクトを急かした。

「そうだな。こうしている間に、クミは危険な目にあっているかもしれない」

「よし、行くぞ！」

リクトは、ケンゴと一緒にかけ出した。

「クミ、無事でいるといいけどなあ」

と、リクトが不安そうにケンゴの後を追って走り出した。

「少し、きりがかかってきたな」

空を見上げると、さっきまで青空だったはずの空が急に暗くなってきた。

気がつくやうに、あの時の二人組がいた。

「あ、あいつらだ」

「追いかけてよう」

二人は、走り出した。そして、二人は、

「おい、二人組！ クミを返せ！」

と言った。

「ハッ、ハッ、ハッ。待っていたぞ。ケンゴ君、リクト君」

不気味なほどゆっくりと話し始めてきた。そんな二人組とは対照的に、

「飛行機ならやるから、クミを返せ！」

と声をそろえて言った。

「なら、先に飛行機をわたせ。そしたら小娘を返してやる」

「わ、わかった」

そそくさと、ケンゴは二人組に飛行機をわたした。

「ありがとさん」

と言ったか言わないかの間に、

「フッ。飛行機をもらったぜ。じゃーな」

すぐさま去っていった。ケンゴやリクトはあわてて、

「おっ、おい待てよ。クミを返せ」

と言う声に重なって、

「助けて。ケンゴ、リクト！ 助けて〜」

クミの声がはっきりと聞こえてきた。リクトもケンゴも、

「クミー」

声のする方を向いて叫んだ。そんな間にブーンと二人組は、去って行ってしまった。

「くそー。クミー。クミー」

雷と似た音が聞こえてきたので二人は驚き、あたりをきょろきょろ見まわした。

それは、ラジコンヘリだった。なんと、そのラジコンヘリがその不思議な飛行機のように大きくなった。気がついたら二人は、そのヘリに乗って二人組を追っていた。飛んでいくうちに、二人組のアジトに着いた。アジトの中は、真っ暗だった。進んでいくうちに二人組の話し声が聞こえた。

「おい。この小娘どうする？」

「ここに、しばっておけばいいだろ」

二人組は、すっかりリラックスしてのん気に何かを飲みながら話していた。そして、クミをイスにグルグルとなわで巻き始めた。クミは、いたい、いたいと体を動かしながら何とかイスから逃げ出そうと必死に体を動かしている。そんなクミなんか相手にもしないで、すっかり安心した面持ちで、

「じゃあ、向こうに行くか」

二人組はアジトの奥に行ってしまった。

ケンゴとリクトは、じっと陰にかくれてもどかしく思いながらその様子を見ていた。奥に行った二人組を見たそのすきに、クミを助けに走った。そして、素早くなわをほどいた。慌てていたが案外すんなりなわがほどけた。二人に見つからないように声をかけた。

「クミ！ 大丈夫か？」

「私は大丈夫。それより、飛行機どうするの？」

「まずいな。あの二人組が持っているみたいだ。それより、早く逃げよう」

話し合うよりもまずここから逃げ出さないと、三人はその場から走り去った。

無事に家に帰った。帰ってからどうがんばっても、どうやって帰ってきたのか三人とも思い出せなかった。

何日か過ぎ、ケンゴのもとへ手紙が届いた。

『ありがとう。実は、あの飛行機は私たちにとって、とても大切なものだったのです。私たちが、お母さんからもらった最後のプレゼントだったのです。でも、勝手に、あの店のおばあさんが持って行ったのです。みんなを危険な目にあわせてごめん。』

二人組より』

ケンゴは、リクトとクミにその手紙を見せた。リクトが、  
「あの二人組、いいやつだったんだ」

と言った。クミもそう言われると、飛行機の中でも高山でもいすに結ばれる以外はやさしかったなと考えていた。三人は何もなかったように、笑いながら帰っていった。